

# わたしの雪国ものがたり

小林 茂

雪国に風が吹くと吹雪になる。ぼさぼさと雪が降る。校内放送が流れる。「今日は、雪が降り続けているため、授業を切り上げ、集団下校となりました。全員、体育館に集合してください」。教室がざわついた。先生も緊張している。小学校が大雪のために早上がりになったのだ。空を見上げながら恐ろしい気持ちがいってくる。しかし、内心スリル満点。集団で雪道を家に帰るときうれしさは格別である。ひとりふたりと道に分かれていく。私の家は村落から離れているので、一人で吹雪の雪原ゆきばらに出た。冷たい雪まじりの強風が全身を襲う。ごうごうと雪煙が流れていく。目の前が見えない。かんじき（雪の上をあるく道具）でつけた道もわからない。真白な吹雪のなかで桑の木の枝が刺さっている。そこは人が歩いて堅雪となっているために歩ける道なのだ。たった一人で渡り切らなければならぬ。道を踏みはずすと、腰まで雪の中に埋まった。長靴に入ってしまった雪は冷たい。ようよう家にたどりつき、長靴を

脱ぐと足はぐつしよりと濡れ、ほかほかと湯気をあげた。雪国の暮らしを知らない人に、その生活を伝えるのはむずかしい。雪のない地方からスキー場へ行く人も多いだろうが、その時のゲレンデの雪と暮らしの雪はまるでちがうのではないだろうか。

雪国の人びとにとって雪は大自然の変化した姿であり、生活を苦しめるものであると同時に、いとおいしいものでもある。愛憎なかばする。雪は災害ももたらすが、豊かな水源となり田畑を潤す。子どもはおもしろいばかりである。大雪になればなるほどわくわくする。雪国では雪が降る前に冬支度をした。家や庭木の冬囲い。野菜は漬物にできるものは漬物に、塩漬けにできるものは塩漬けに。生の大根や白菜は家の近くに浅い穴をほり、そのまま雪の下に埋める。そこに一本の竹棒を刺しておく。必要な時にはその雪を掘り、野菜を取り出す。瑞々しい。天然の冷蔵庫である。掘り出すのは子どもの仕事であった。